

# 教育

てれす「」

岩間君は、二歳の時、先天性視力障害が始め、今はほとんど視力のない全盲。義務教育の九年間を、江別市大麻にある札幌盲学校(高倉幸蔵校長)で勉強してきた。高校進学に際して、岩間君は普通高校を受験することを希望した。同盲学校の高等部に進学すれば、大学進学がむずかしくなり、アンマやハリ、キユウに偏りがちな盲人の職域を何とかして広げたい、という同君の望みが絶たれる可能性が強いためだった。

このため、同盲学校の先生たちは、全盲を受け入れてくれる高校を捜しまわった。だが、少数の高校で、弱視者の受験を認めていたものの、全盲となると、どこも固く門を閉ざしたままだった。そんな中で、北星学園男子高校だけが、検討の末、受験を認めた。関係者の喜びはひとしおだった。そこで、校内をひと回りしただけで、

校舎の輪郭をおぼえた。今では、自分の教室はもろろん、職員室、図書室など、どこでも一人でゆけるようになった。同級生との関係もうまくいっている。入学当時、やはりもの珍しさがあったが、最近では、障害者に対する理解も深まってきた。神田先生は「クラス全体が、岩間君の勉強に協力しようという気持ちで満ちている。授業中は、耳だけに頼っている同君のことを気づかっているせいも、他のクラスより静かですね」という。また、授業の中で一番困難だと思われた体育でも、同君はずばらしい能力を発揮した。球技は目が見えない以上、むずかしいが、個人競技はたいがいこなす。特に得意なのは短距離競走で、五〇メートル七秒で走る。

## 盲人の普通高校入学

「体育は苦手だけど、英語と数学はおもしろい」——全盲生徒としては、初めて普通高校への入学を果たした、札幌市西区琴似八軒の私立北星学園男子高校(松田平太郎校長)一年、岩間勝美君(一五)札幌盲学校出身が、元氣よく高校生活を送っている。当初、予想された様々な問題は、関係者の温かい協力で、ほとんどが解決された。岩間君の普通高校への願望ぶりは、盲人というだけでなく、普通教育への門を閉ざしてきた、今の教育制度に大きな疑問を投げかけている。

同君の入学を認めた北星学園男子高校側にも、初めてのケースだけに、一般の生徒から孤立しないか、校内でけがをしないか、体育の実技をどうするかなど、心配がつきまどった。だが、岩間君が学校になれるにつれ、先生たちの不安は消えていった。同君は入学前に、札幌盲学校の先生に案内され、校内をひと回りしただけで、

# 苦手な体育もこなす

## 関係者の努力で問題を解決

だが、岩間君の普通高校での生活が、このように円滑に進むには関係者の隠された努力があった。まず、札幌盲学校の担任だった鈴木重男先生が、北星学園男子高校の近くのアパートに、岩間君と移り住んで、岩間君といっしょに入学した弱視の生徒と三人で共同生活を始めた。鈴木先生は、二人の朝食と昼の弁当をつくってから江別の学校へ出勤、夜は夕食をつくる毎日を送っている。また、岩間君の教科書、試験問題の点字化、点字板の使いやすい学習機の整備などが、点字翻訳の生徒も少なくないという。だが、道教委、学校側とも「現状では普通通校での全盲者の教育は困難だ」として、入学を認めていないのが実情だ。その理由は、文字が判読できる弱視者と違って、点字が全盲者の教育には不可欠で、普通教育機関ではその条件整備がむずかしいからだ、といわれる。岩間君の普通高校入学は、教育界に大きな波紋を呼び起こしている。